

高松塚古墳の調査

—第154次

1 はじめに

2007年度に実施した石室解体事業に引き続き、高松塚古墳の仮整備にむけた発掘調査を、奈良県立橿原考古学研究所、明日香村教育委員会と共同で実施した。調査面積は370㎡で、調査期間は2008年7月1日～2009年2月13日である。

高松塚古墳の墳形および規模については、2004年度に実施した発掘調査で、墳丘北半部をめぐる周溝を検出し、上段部の直径17.7m、下段部の直径23mの二段築成の円墳であることが判明している（奈文研編『高松塚古墳の調査 国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策検討のための平成16年度発掘調査報告』2006）。しかしながら、墳丘南半部には、1975年に建設された保存施設の一部を覆うように厚く盛土がなされており、古墳は瓢箪形に姿を変えている。仮整備事業では、旧来の保存施設を撤去し、古墳を築造当初の姿に復元整備することが決定された。これに伴って、整備盛土の除去や保存施設撤去後の墓道部の再調査が必要になるとともに、これまで調査が及んでいない墳丘南半部についても発掘調査を実施し、整備のための情報収集をおこなうこととなった。

調査は、まず、墳丘南半部を覆う整備盛土を全面的に除去した後に、2004年度に墳丘北東側で検出した周溝の南への延び、ないしは収束のあり方を明らかにする目的で、墳丘南東側を276㎡にわたって平面的に調査した。



図102 南東側調査区全景（南東から）

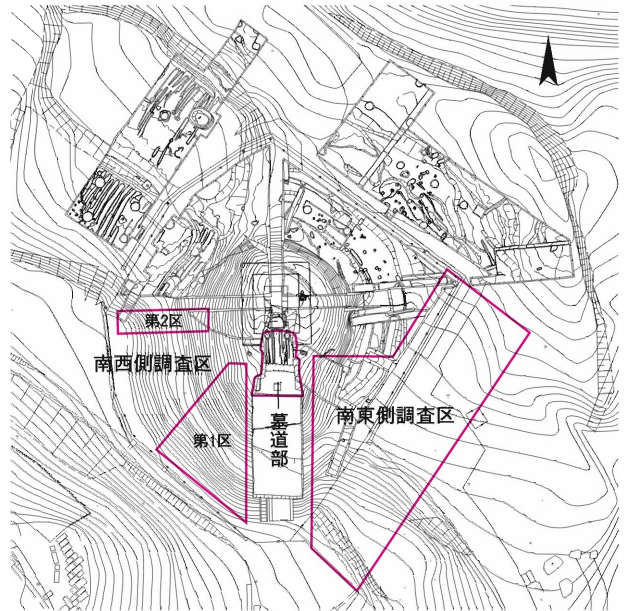


図101 調査区位置図

南東側の調査終了後に、保存施設（2階部分）の解体工事をおこない、続いて、墳丘南西側と露出した墓道部の調査を合わせて実施した。

高松塚古墳における造成土下の基本層序は、上から整備以前の表土層、瓦器を含む中世以降の遺物包含層、周溝埋土、墳丘封土（版築層）、7世紀代の土器を含む遺物包含層、白色シルト層・黄褐色粗砂・砂礫層からなる地山層である。

2004年度の調査では、古墳の北側と東側で墳丘下の基盤面の様相が異なることが判明している。すなわち、北側では地山を開削した基盤面上に直接、墳丘が築かれているのに対し、東側では墳丘および周溝下に7世紀代の土器を含む遺物包含層が存在することが明らかになっている。今回の墳丘南半部の調査でも、地山上を7世紀代の遺物包含層が広く覆う状況を確認した。この遺物包含層は、後述するように、墳丘基盤面の造成に伴う人工的な整地土と判断できる。



図103 保存施設撤去後の高松塚古墳（南から）

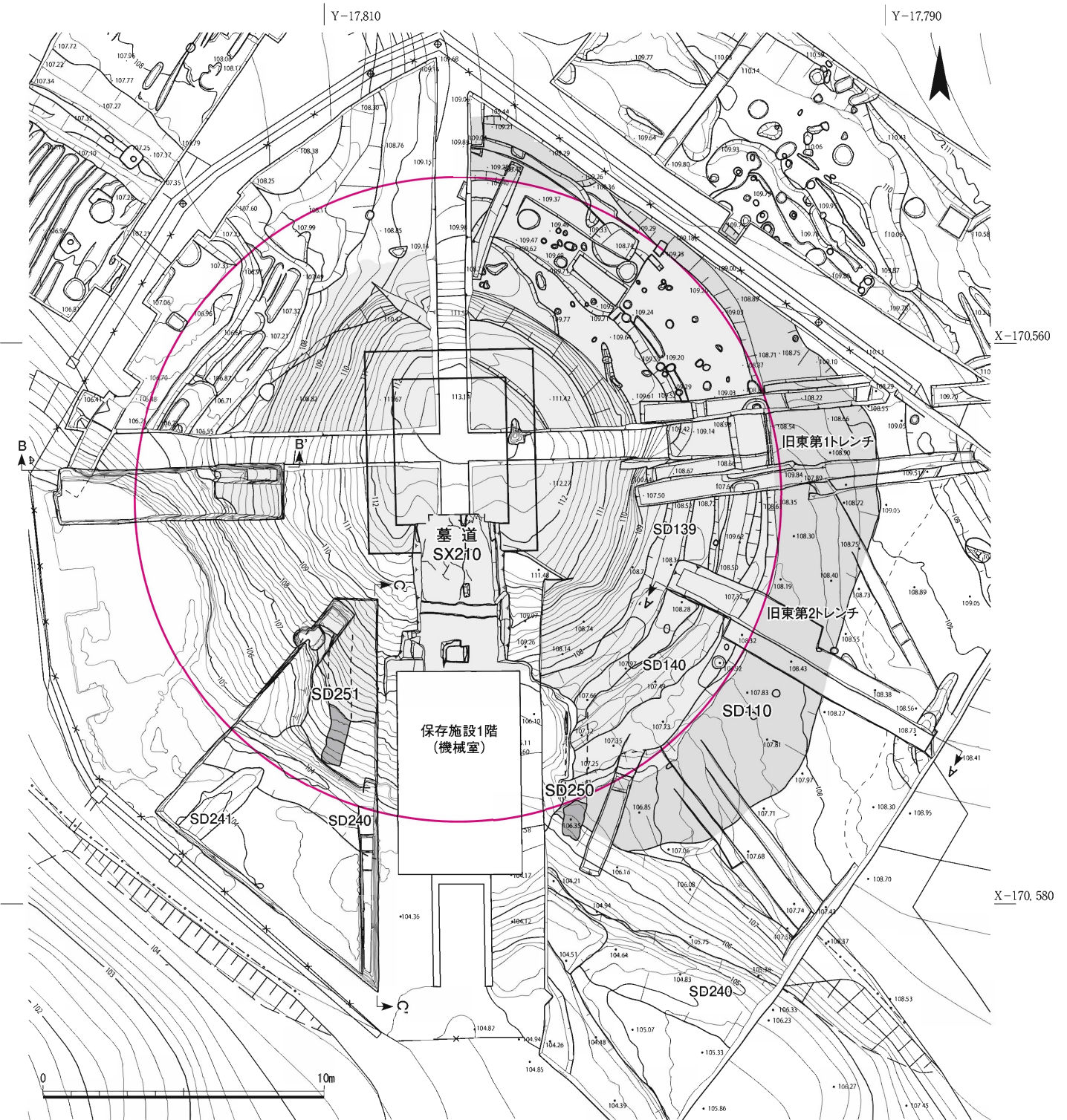


図104 高松塚古墳遺構図 1 : 200

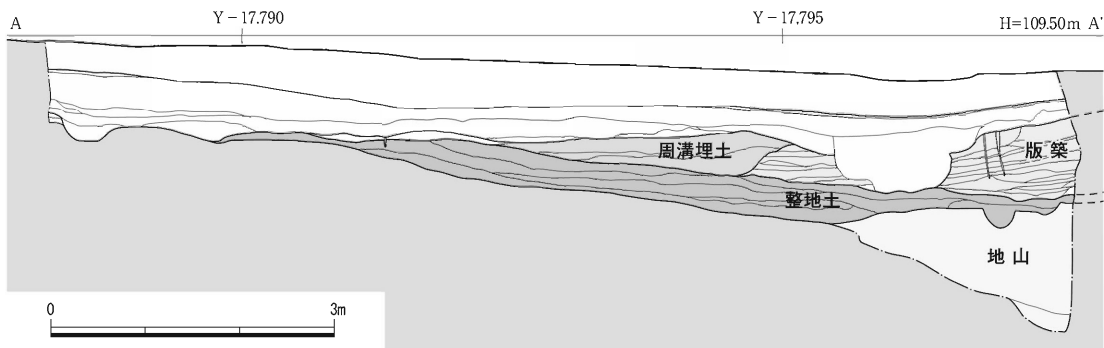


図105 旧東第2トレンチ南壁断面図 1 : 80

2 墳丘南東側の調査

墳丘南東側は、北東から南西にむかって下降する緩やかな斜面をなしており、史跡整備時に敷設されたインターロッキングおよびそれに伴う造成土で覆われていた。それらを除去すると、1972年調査時の旧トレンチが2本、調査区北側と中央で検出された。2004年度調査時に検出・再調査した旧東第1トレンチと同第2トレンチの東半部分にあたり、両者とも地山面まで掘り抜かれていた。この2本の旧トレンチを東へ拡張し、層序の確認をおこないながら調査を進めた。

周溝SD110 2004年度の調査区から続く墳丘の南東側裾部分、およびそれをとりまく周溝SD110を整地土上で検出した。後世の削平のため、周溝の深さは0.4mと浅く、幅も2.8～4mと一定でない。墳丘も削平をうけており、その上面には同じく2004年度調査区から続く中世溝SD139、近代溝SD140が弧状に走る。

周溝内壁は版築層を掘り込んでおり、各所とも30～40°の傾斜で立ち上がる。その下端が墳丘裾にあたるが、上

面には断面三角形の黄褐色粘質土が厚く堆積しており、墳丘上部からの崩落土によって墳丘裾が早い時期に埋没した状況がうかがえた。したがって、墳丘裾については、本来の状態をとどめている可能性が高い。その形状をもとに墳丘を復元すると、直径23m余の円墳となり、2004年度の復元案の妥当性を追認する結果となった。

なお、後述のように、調査区南端は後世に大きく開削を受けており、周溝の南端部分も失われていた。

石詰暗渠SD250 保存施設東脇で、周溝に向かって延びる石詰暗渠を検出した。先端は削平を受けているが、幅0.5m、深さ0.4mの断面箱形の溝に7cm大の角礫を充填しており、版築の施工前に整地土の上面から掘り込まれている。いわゆる墳丘内暗渠であり、封土下に存在するため、その正確な配置状況を明らかにしがたいが、約3m北の保存施設建設時の掘削面にも続きが認められることから、墳丘南北軸から東約4mの位置に直線的に配置されているものと理解できる。

基盤面の造成 調査区南端は、丘陵下に広がる谷水田の造成時に基盤層ごと大きく削り取られていたが、その開

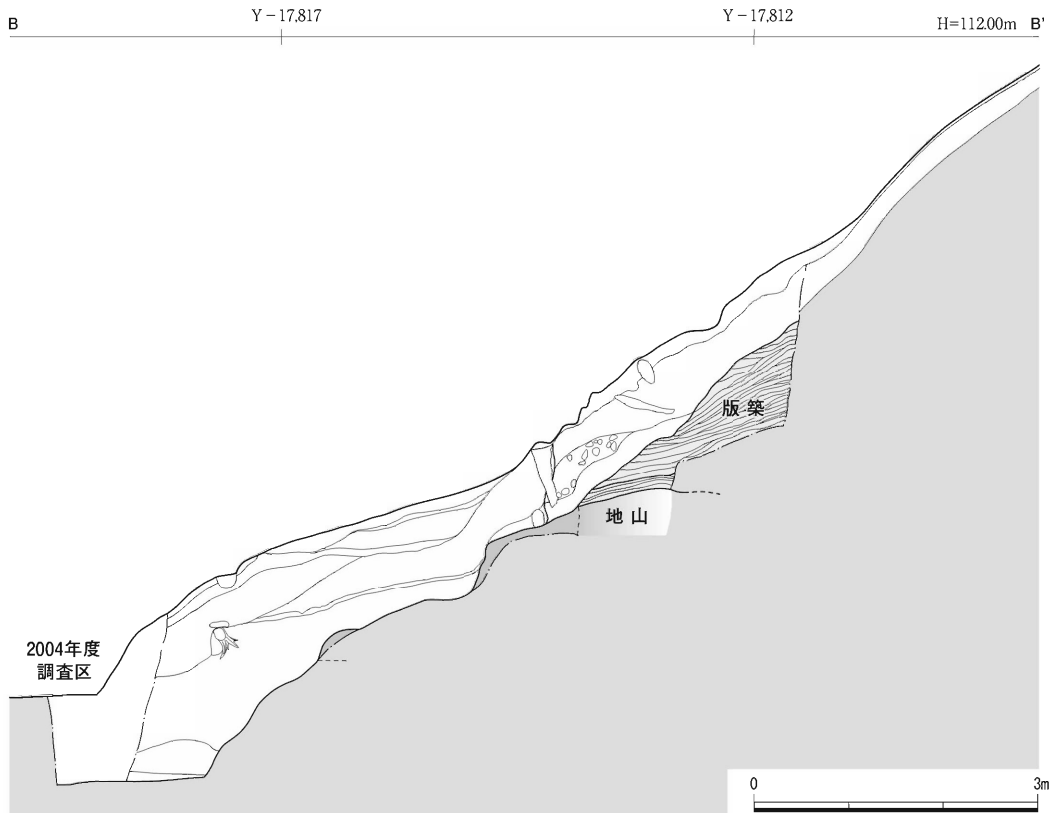


図106 南西側第2調査区北壁断面図 1:80

剖面では、整地土下に古墳築造以前の旧表土（灰色粘質土）層が観察され、約30°の傾斜で北西向きに落ち込む状況を確認した。後述の墳丘南西側の調査でも、封土下で南東向きに下降する旧表土層を確認しており、これにより、古墳南裾から東裾にかけて古墳築造以前の谷が入り込むことが明確となった。その規模は、幅約12m、深さ2.3m以上と推定される。2004年度の調査時にも、古墳は、丘陵斜面の地山を開削するとともに、南東側に存在した谷を埋め立てて造成した基盤面の上に築造されていることが推測されてきたが、今回の調査により、谷の埋め立てが予想以上に大規模であること、また、それに伴う整地土が丘陵の東や南側へも広く及ぶことが判明した。なお、整地土内に含まれる土器は、飛鳥V（藤原宮期）を下限とすることを再確認した。

3 墳丘南西側の調査

墳丘の残存状況 南西側の墳丘や周溝の形状、丘陵斜面や基盤面の処理のあり方を明らかにする目的で、2ヶ所に計80㎡の調査区を設定した。しかしながら、2ヶ所の調査区にまたがって、幅約10m、奥行き約2mにおよぶ地滑り跡が検出され、大規模地震によって墳丘南西斜面

が崩落した状況が把握された。加えて、谷水田の造成による開削が及んでおり、南西斜面については築造当初の墳丘の姿をとどめていないことが明らかになった。

ただし、南東側の調査成果に基づき図上で直径23mの円を描くと、地滑りを免れた南斜面では斜面裾のわずかに外側を円が通過する（図104）。したがって、南斜面については、後世の開削の影響が小さく、比較的当初の形状が残存しているものとみられる。

基盤面と旧地形 南西斜面でも南東側と同様に、版築下で古墳築造以前の谷と、その埋め立てに伴う整地土層を確認した。谷は予想以上に深く、調査区内では、谷底や南側の立ち上がりを捉えきれなかった。整地の範囲も調査区を越えてさらに南側へと延びる（図107）。一方、旧表土層および地山の岩盤層は北西にいくにつれて上昇し、墳丘西側では地山上に直接版築が施される。

現存する版築下端の標高は、南端で106.6m前後、西端で107.0m前後を測る。基盤面は、概ねテラス状に造成されているものの、墳丘南西側では10～15°前後の傾きで南向きに下降しているようである。

石詰暗渠SD251 保存施設東脇に続いて、西脇でも、石詰暗渠を検出した。幅0.6m、検出長約2mであるが、

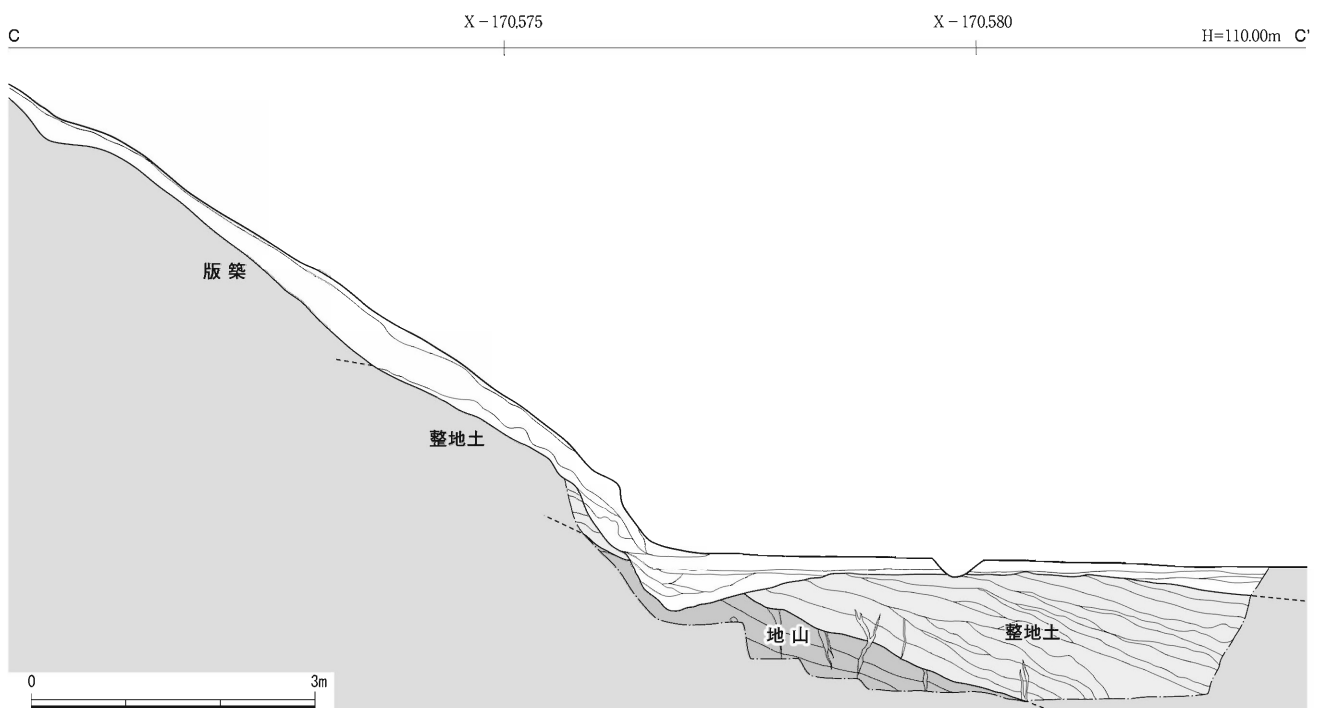


図107 南西側第1調査区東壁断面図 1 : 80



図108 南西側の暗渠SD251と地滑り（南西から）



図109 南東側の周溝と暗渠SD250（西から）



図110 墓道部西壁（南東から）

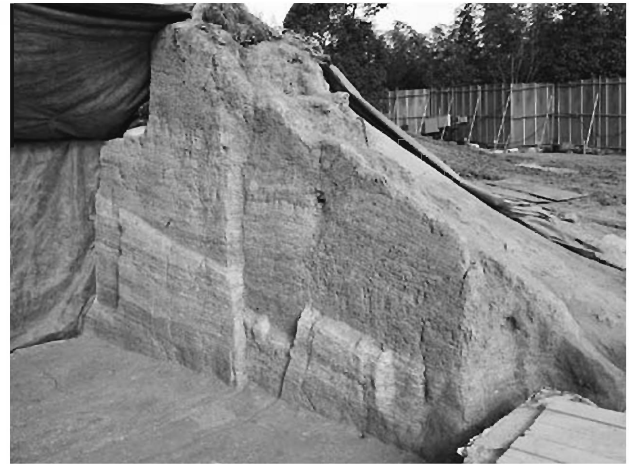


図111 墓道部東壁（南西から）

墳丘ごと削平を受けており、本来はさらに南へ延びていたものと推測される。東側のSD250の傾斜角度が 5° 前後であるのに対し、SD251は 15° 前後で築かれているが、これは南西側の基盤面の傾斜角度に起因したものと考えられる。墳丘南北軸から西4mの位置にあり、SD250と同様に、版築の施工前に整地土の上面から掘り込まれていることから、2本の暗渠は、東西対称の位置に計画的に配置されたものと判断できる。石室周囲に浸透する水や湿気を墳丘外へ排出する目的で設置されたものである可能性が高い。

4 墓道部の再調査

保存施設は、1974年に発掘調査がなされた墓道部分に収まるように建設され、石室解体作業開始直前まで稼働してきた。仮整備に伴い保存施設（2階部分）が撤去されたことにより、34年ぶりに墓道部が露出した。保存施設は旧発掘区を壊すことなく建設されており、壁面には1974年調査時の分層線がそのまま残っていた。東壁下半には、石室構築後に掘り込まれた墓道の壁面が、西壁に

はその墓道を埋めた際の版築が残る。2006・2007年度調査時に作成した墳丘の南北土層断面図と整合させるため、壁面の再分層と記録作業をおこなった。壁面の精査により、従来知られていた大規模地震による大きな断層風陥没とともに、版築を突き破る亀裂を多数確認した。なお、保存施設1階（機械室）部分の撤去工事とその後の調査は、2009年度に継続して実施する予定である。

5 おわりに

以上のように、今回の発掘調査では、古墳築造時の南面の姿を明らかにすることはできなかったものの、南東側で墳丘裾および周溝を検出し、従来の墳丘復元案を追認することができた。それとともに、旧地形や古墳の築造工程に関する重要な所見を得ることができた。とりわけ、これまで未確認であった墳丘内暗渠の存在が明らかとなり、当初から古墳全体が綿密な計画性のもとに築造されていた状況を裏付けることができた。今後は、これまでの数次にわたる発掘成果を総合して、築造時の高松塚古墳の姿に迫りたいと考える。 (廣瀬 寛)